

まい 埋やちよ

No. 44

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2020. 6. 29
(令和 2 年)

特集 縄文時代早期の八千代市

はじめに

縄文時代早期は、貝塚に代表されるように、温暖化によって多様な食料資源が利用されるようになり、縄文文化の基礎がつけられた時代と言えます。(山田 2019) 八千代市には発掘調査によって豊富な早期の資料が蓄積されていることから、早期は八千代市における文化財の特色の1つと言えます。今回の特集では、この特色に焦点をあて、当時の人々が八千代市域でどのような生活を営んでいたのかを見ていきます。

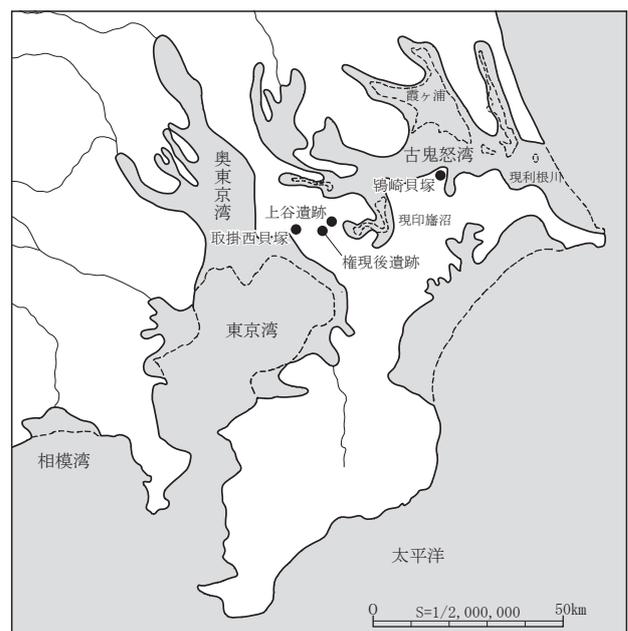
縄文時代早期はどんな時代？

早期は今から7,000～11,500年前頃の期間を指し(第1表)、寒かった氷河期が終わり、温暖化が進んだ時代です。温暖化によって海水面が上昇したことで、東京湾の海水は現在の群馬県南部にまで入り込み(これを「奥東京湾」と言います)、霞ヶ浦と印旛沼、利根川中流域・下流域は1つの湾(「古鬼怒湾」と言います)となり、九十九里浜には海が広がっていました(第1図)。この現象を「縄文海進」と言います。

これらの現象に伴うように、列島各地で貝塚が形成されるようになります。たとえば、古鬼

怒湾に面していた香取市鶴崎貝塚はヤマトシジミやハマグリ、マガキの貝殻で形成された貝塚で、他にもクロダイやマダイ、スズキ、サメといった魚骨も発見されています。植物・動物資源も積極的に活用されていて、船橋市取掛西貝塚ではダイズやアズキの野生種や、イノシシ・シカの頭骨が発見されています(船橋市教育委員会編 2019)。

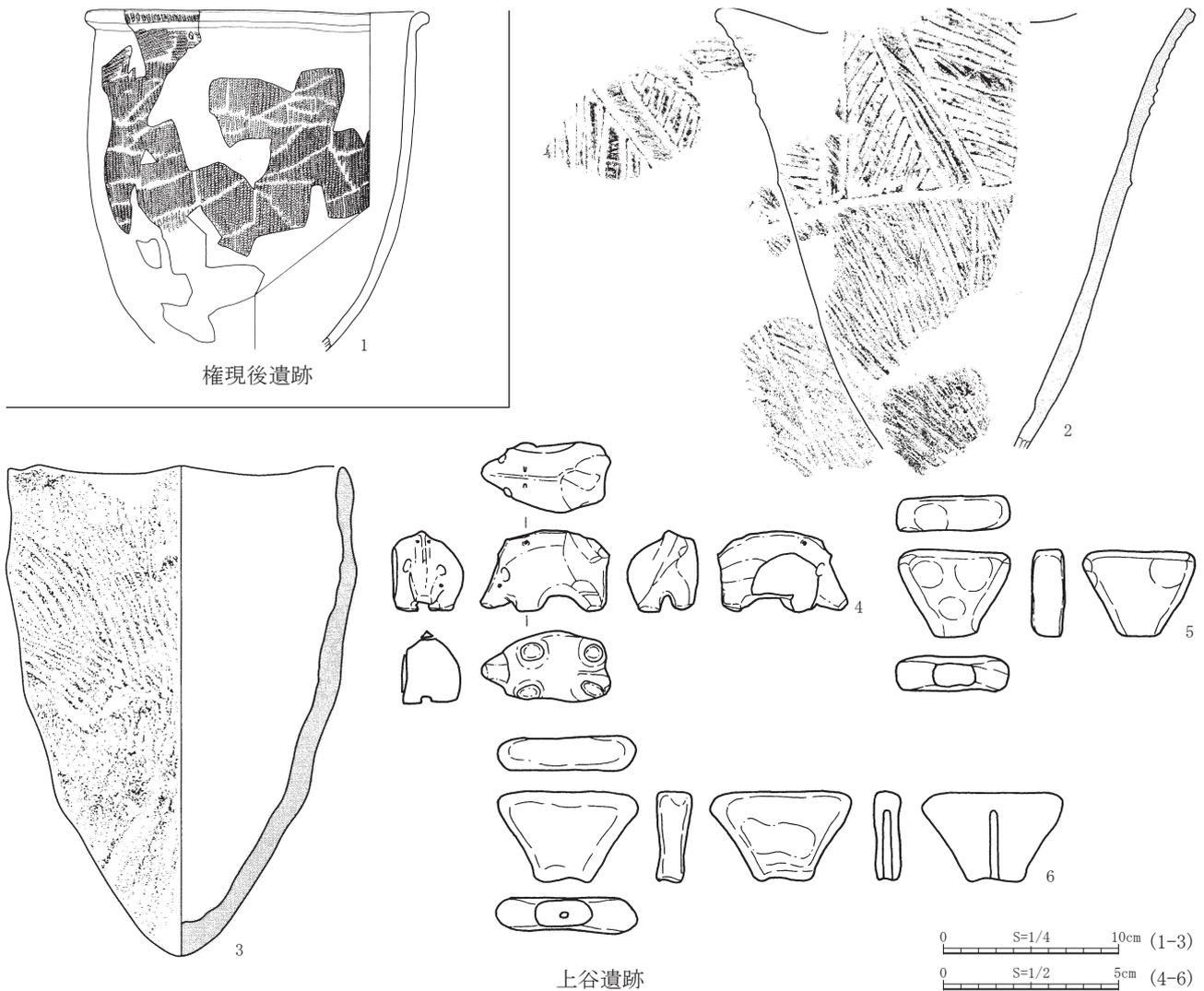
早期は、草創期とくらべて堅穴建物(地面を掘りくぼめて作られた建物のこと)の数が全国で格段に多くなります。さらに、取掛西貝塚では、草創期のような簡単なつくりのものとは違って、かなりの労力をかけた掘り込みの深い堅穴建物が発見されています。また、貝塚が形成されるということは、生ごみとしての貝殻が



第1図 縄文時代早期後半～前期前半の海外線

第1表 縄文時代の年代観

時代名	年代
草創期	11,500～16,500年前頃
早期	7,000～11,500年前頃
前期	5,470～7,000年前頃
中期	4,420～5,470年前頃
後期	3,220～4,420年前頃
晩期	2,350～3,220年前頃



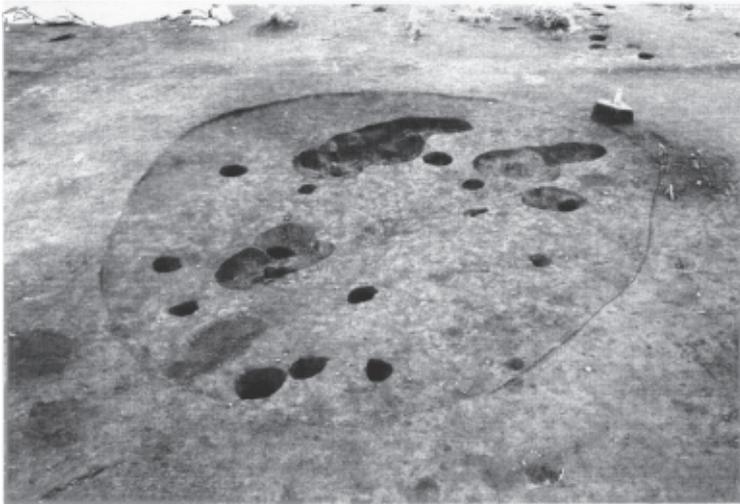
第2図 八千代市内で見つかった縄文時代早期の土器・土偶

堆積するほどの期間その場所に住んでいたと考えられます(山田 2019)。これらのことから、草創期とくらべて早期の人々はより長くその地に滞在しようという意識、つまり定住^{ていじゅう}への意識を高めたと言えるでしょう。この背景には、温暖化によって利用できる食料資源が豊かになったことで、長く滞在しても食料不足に陥る危険が低くなったことがあるのかもしれません。ただ、注意しなくてはならないのは、ずっとその場に留まったということではなく、季節に合わせて定期的に定まった場所への移動は繰り返していたようです(山田 2019)。

遺構から見る縄文時代早期の八千代市

八千代市内でも早期の竪穴建物^{かみや}が上谷遺跡で

2棟発見されています(第3図左上)。いずれも掘り込みが浅く、柱穴も浅い簡単なつくりとなっています。上谷遺跡の調査面積は114,300㎡と広大にもかかわらず、簡単なつくりの竪穴建物が2棟しか発見されなかったため、これだけを見ると定住していたようには思われなくてもいいかもしれません。ところが、炉穴^{ろあな}という遺構に目を向けると様子は一変します。炉穴とは、人々が火を焚いて料理をするために屋外につくったと考えられている遺構で、とくに早期に数多くつくられたのですが、上谷遺跡では300基を超える数の炉穴が発見されたのです(第3図右上)。第3図右下のように煙道が付く可能性がある炉穴も検出されましたが、残念ながら確実にそれと言えるものではありませんでした。し



縄文時代早期の竪穴建物



縄文時代早期の炉穴



縄文時代早期のピットで検出された貝層



縄文時代早期の炉穴の復原図

第3図 八千代市上谷遺跡で見つかった縄文時代早期の遺構・遺物

かし、これほどの数の炉穴が発見されるということは、縄文早期の人々が長い期間にわたって生活していたと考えるのが妥当です。竪穴建物の数が少ないのは、おそらく本来はもっと多くの竪穴建物があったものの、掘り込みが浅いために調査時に検出できなかつたりなどしてその数が少なくなってしまったのかもしれませんが。

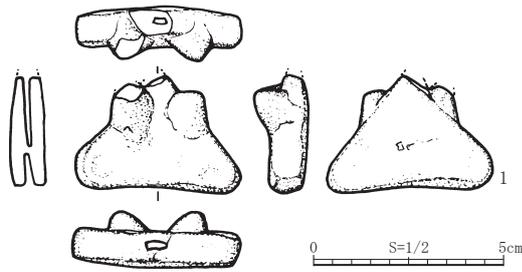
遺物から見る縄文時代早期の八千代市

早期の土器の底部は尖^{とが}っていて、とても特徴的な形をしています（第2図1～3）。このままでは炉に据え置くことができないですから、おそらくは炉に穴を掘って土器を固定した、あるいは石などで土器の底部を挟んで固定したと考えられます。次に土器の作り方を見てみま

しょう。早期前半は縄文（土器の表面に縄を転がして文様としたもの）を施した土器が主流だったのですが（第2図1）、早期後半になると二枚貝の殻で土器の器面をなでた「条痕文土器^{じょうこんもん}」というものが主流になります。縄文が施された土器は作られなくなります。縄文時代と言われるくらいですから、縄文が常に使われていたと思われるかもしれませんが、縄文が使われなくなる時期もあったのです。

日本列島で初めて土偶が作られるようになったのは草創期ですが、早期になるとその出土量が増加します。土偶は祭祀に使われたと考えられていますから、土偶を使った祭祀が列島各地で盛んになったと考えられます。

早期の人物土偶は小型でとても単純な作りを



第4図 成田市木の根拓美遺跡出土土偶

してしていました。たとえば、上谷遺跡から出土した人物土偶は幅が2～3cm程度と小さく、ヒトの体は三角形で表現されています（第2図5・6）。第2図6には棒を指したと思われる細く小さな穴があることから、上半身と下半身のパーツを別々に作って組み合わせたのかもしれませんが。人物土偶の性別は上谷遺跡のものからは判断できませんが、成田市木の根拓美遺跡で出土した早期の土偶には女性の胸が表現されていることから（第4図2）、第2図5・6も同様に女性を象ったものである可能性があります。このように人物土偶はとても単純な作りでしたが、上谷遺跡から出土したイノシシ形土偶は写実性が高く、手足と顔がはっきりとしています（第2図4）。こちらもおそらく祭祀に使われたと考えられますが、どうしてこれほど対照的な作りを人物土偶とイノシシ形土偶がしているのかはまだよくわかりません。

食料資源から見る縄文時代早期の八千代市

現在の八千代市は内陸に位置しているため、海からは遠い印象を持たれるかもしれません。しかし、当時は縄文海進によって印旛沼が海だったことから（第1図）、八千代市域に住んでいた縄文人にとって海は近い存在だったと考えられます。なぜなら、上谷遺跡で早期のオキシジミ・アサリ・ハイガイ・カキが出土しているからです（第3図）。ただし、上谷遺跡で出土した貝は量的には少なく、このことから海産資源の利用はそれほど活発ではなかったと考えられます。おそらく、上谷遺跡で暮らしていた当時の人々にとって海産資源は彼らの生活を支えるほどの重要性はなかったのでしょう。

おわりに

早期は、日本列島において多様な食料資源を活用した時代でした。温暖化に伴う縄文海進によって得られるようになった海産資源を活用していた様子を八千代市の遺跡でも見る事ができました。ただ、残念なことに八千代市域に暮らした縄文人がどのような植物・動物資源を活用していたのかは未だによくわかりません。この点は今後の調査・研究の進展によって明らかになっていくものと思われます。

引用・参考文献

- 国立歴史民俗博物館編 2009『縄文はいつから！？』（財）歴史民俗博物館振興会
- 財団法人印旛郡市文化財センター 2007『印旛の原始・古代—縄文時代編—』（財）印旛郡市文化財センター
- 財団法人千葉県史料研究財団編 2007『千葉県の歴史 通史編 原始・古代1』千葉県
- 船橋市教育委員会編 2019『取掛西貝塚』船橋市教育委員会
- 宮 重行・池田大助・野口行雄編 1981『木の根』新東京国際空港公団・（財）千葉県文化財センター
- 山田康弘 2019『縄文時代の歴史』講談社

図版出典

- 第1表：『縄文時代の歴史』を参考に作成。
- 第1図：『千葉県の歴史 通史編 原始・古代1』を参考に作成。
- 第2図：『権現後遺跡』、『上谷遺跡 第1分冊』、『上谷遺跡 第2分冊』、『上谷遺跡 第5分冊』から転載。
- 第3図：左上は『上谷遺跡 第2分冊』、左下・右下は『上谷遺跡 第4分冊』から転載、右下は三重県埋蔵文化財センター提供。
- 第4図：『木の根』から転載。

埋（まい）やちよ No.44
 千葉県八千代市埋蔵文化財通信一
 令和2年6月29日
 編集・発行 八千代市教育委員会
 文化・スポーツ課文化財班
 八千代市大和田138-2
 ☎276-0045 ☎047(481)0304



やっち